

# ダニエル書 - ナンバー161

聖書預言の全体像を確立するうえでのローマの役割：ダニエル書第11章の詳細な検討

Jeff Pippenger

2024-03-27

ダニエル書11章の幻は、聖書預言におけるすべての幻の中心的な参照点であり、同章の幻はローマの象徴によって確立されている。

また、そのころには多くの者が南の王に逆らって立ち上がる。さらに、あなたの民の略奪者たちも、幻を成就させようとして高ぶる。しかし、彼らは倒れる。ダニエル 11:14.

ジョーンズは前の節について次のように述べている。

アモリ人の罪が満ちたとき、その地は神の民イスラエルに与えられた。イスラエルがまた、異邦人のならいに倣って不義の杯を満たしたとき、神はバビロンの王国を興し、ことごとく連れ去らせた。バビロンがその不義の杯を満たしたとき、その権勢はペルシアに移された。そして、ペルシア人の悪によって御使いが退けられたとき、ギリシャの君が現れてそれを一掃した。

では、ギリシアの権勢はどれほどの間続くことになっていたのか。それはいつ打ち碎かれることになっていたのか。「背く者たちの悪が満ちるに至ったとき」である。その国は自らの不義が満ちるまで存続し、満ちたとき、その権勢は別の王国へと移される。その移された権力がローマのものであったことは、ダニエル書11章14節からわかる。「そのころ、多くの者が南の王に敵対して立ち上がる。あなたの民の盗賊たちもまた、幻を確立しようとして高ぶる。しかし彼らは倒れる。」この国は、本文の欄外の注が述べるように、盗賊の国、すなわち盗賊の子らとして指し示されている。

「これらこそ、今や王国が与えられている者たちである。では、何のためか。-『略奪者の子らは、幻を成り立たせるために自らを高めるであろう。』この国家が舞台上に登場するとき、幻を成り立たせるものが現れる。すなわち、それは幻の大いなる目的の一つであり、神があらゆる時代を通じて預言者たちに与えてこられた幻の連なりにおける唯一の主要な道標である。」 A・T・ジョーンズ『The Columbian Year and the Meaning of the Four Centuries』、6.

ジョーンズは、ローマの権力が「舞台上に登場すると、そこで…を確立するものが入り込み」…「神が預言者たちを通してすべての時代に与えられた見通し」が据えられるのだ、と述べている。ミラー派の歴史では、プロテスタントは、現在のラオデキア・アドベンチズムがそうしているのと同様に、「あなたの民の略奪者たち」はアンティオコス・エピファネス、すなわち紀元前175年から前164年に支配したセレウコス朝の王を指すと教えた。彼はセレウコス朝の一員であり、同王朝はアレクサンダー大王の帝国の崩壊から生まれたギリシャ系後継国家の一つであった。この問題をめぐる不一致はミラー派の歴史においてきわめて明確で、1843年のパイオニア・チャートにアンティオコス・エピファネス

スの同定が示されているほどであった。

図表におけるアンティオコスへの言及は、神の預言の御言葉の中に見いだされない事柄への唯一の言及を表している。それは、その時代のプロテスタントの誤った教え、すなわち今日ではラオデキヤ的アドベンチズムの誤った教えとなっているものを論駁するためにそこに置かれている。ローマが「神がすべての時代のために預言者たちを通して与えられた視界の線」を確立する地上の権力であることを理解することの重要性の深みを、ウィリアム・ミラーが理解していたかどうかは疑わしいが、ローマがその幻を確立するという事実を十分に、かつ確固として擁護するには明白であった。

幻がないところでは、民は滅びる。しかし、律法を守る者は幸いである。箴言 28:14.

ソロモンは「幻がなければ民は滅びる」と記した。そして、十四節にあるヘブライ語の「幻」という語は、ソロモンの箴言にあるものと同じである。幻は生死にかかわる問題であり、その「幻」はローマの象徴によって確立されている。十四節の「幻」という語は、ハバクク書第二章の「幻」と同じ語である。

私は見張りの所に立ち、やぐらに身を置き、彼が私に何を言われるか、また、私が咎められるとき何と答えるべきかを見ようと見張ってしよう。主は私に答えて言われた。「幻を書き記し、板の上にはっきりと記せ。それを読む者が走れるように。というのは、この幻はなお定められた時のためであり、終わりには必ず語り、偽りはない。遅れるようでも、それを待て。必ず来る。遅れることはない。」ハバクク 2:1-3.

第一節の「reproved」という語は「論争した」を意味する。ウィリアム・ミラーは、第一と第二の天使の運動の歴史において塔に立てられた見張り人であり、預言的象徴において彼が自らの歴史をめぐる論争にどう答えるべきかを問いかけたとき、彼はローマの象徴によって確立されているその幻を書き記すよう告げられた。この事実と一致して、ミラライトたちがハバククのこれら三節の成就として1843年の先駆者図表を作成したとき、彼らは自らが関わっていた論争の核心そのものに言及した。彼らは、アンティオコス・エピファネスがその幻を確立した権力であるという愚かな議論に自分たちが言及したことが、ハバクク書第二章の論争を表しているのだということを、疑いなく理解していなかった。しかしホワイト姉妹は、その図表は「主の御手に導かれたものであり、変更すべきではない」と述べているので、その図表における論争への言及は神の御手からのものであった。

ミラー派は、1844年4月19日の最初の失望が、ハバクク書およびマタイの十人の処女のたとえに言及されている遅延の時を開始したことを、正しく理解するに至った。彼らはまた、これら二つの預言がエゼキエル書第十二章と直接結び付いていること、そしてそこにおいてエゼキエルは、すべての幻の効力が現実となる一つの時期を示していることを理解するに至った。この「幻」という語は、今わたしたちが考察しているものと同じヘブライ語である。ゆえに、ジョーンズが次のように述べるとき、彼は正しいのである。すなわち、「ローマが舞台に現れる時、そのとき幻を確立するもの、幻の一つの大いなる目的であるもの、神が預言者たちを通してあらゆる時代のために与えられた幻の線における主要な一つの画期が、そこに入り込むのである。」ローマは神の預言の御言葉の幻全体を確立するのであり、さらにより具体的には、第十一章全体の構造はローマの上に築かれ

ているのである。

ホワイト姉妹がダニエル書第十一章の最終的成就に言及し、「この預言の成就として起こった歴史の多くが繰り返されるであろう」と述べるとき、彼女は、すでに成就していた第十一章の歴史が、ダニエル書第十一章の最後の節々を予表していたことを示している。第十一章最後の節々の主題は北の王であり、そこにおいて彼は現代のローマを表している。したがって、繰り返されるダニエル書第十一章の歴史とは、ローマを表す歴史である。

第11章の最後の6節では、現代ローマ（北の王）が三つの地理的勢力を征服する。40節では、現代ローマは南の王（1989年の旧ソビエト連邦）、栄光の地（間もなく到来する日曜法の際にはアメリカ合衆国）、そしてエジプト（国際連合によって代表される全世界）を征服する。ダニエル書11章では、異教ローマが当時知られていた世界を手中に収めるために三つの地理的勢力を征服するものとして描かれ、その後、教皇ローマも地上を掌握するために三つの地理的勢力を征服するものとして描かれている。

異教ローマは、この章において最初に第十四節で言及されるが、それは幻を確立する象徴としてそれを特定するためであり、その勢力の台頭が扱われるのは第十六節になってからである。アレクサンドロス大王の王国は、神の預言の御言葉の成就として四つの部分に分割されたが、その四つの部分はほどなくして二つの主要な敵対勢力へと集約され、章の結びに至るまで続く預言の叙述において、それぞれ南の王または北の王として特定されている。第十四節では、ローマの興隆する勢力が、その幻を確立する力として言及されているが、そこで扱われている主題は、北の王と南の王によって表されるアレクサンドロスの王国の残余の諸勢力の間の闘争である。

十五節では、その二人の王はなお争いを続けており、北の王が優勢である。しかし十六節になるとローマが登場し、その節は「しかし、彼に立ち向かって来る者は」と言う。つまり、南の王に対して勝利を収めていたばかりの北の王にローマが立ち向かって来るとき、北の王はローマに対して立ちこたえることができないということである。ローマが優勢となり、十六節では、ローマはユダの栄光の地にも立つことになっていた。十七節では、ローマは「その全王国の力をもって、入ることを志す」であろう。彼は自分の前に立ちこたえられない北の王を征し、次いでユダを取り、そののちエジプトへと入った。

その時には、多くの者が南の王に対して立ち上がる。また、あなたの民の暴徒たちも、幻を確立しようとして自らを高ぶらせるが、彼らは倒れる。そこで北の王が来て、攻囲の土塁を築き、最も堅固な町々を攻め取る。南の軍勢は持ちこたえられず、そのえり抜きの者たちもそうであり、立ち向かう力は残らない。しかし彼に向かって来る者は自分の意のままに行い、彼の前に立てる者はひとりもない。彼は美しい地に立ち、その地は彼の手によって荒らされる。彼はまた、全王国の力を携えて侵入しようと心を定め、正しい者たちをも彼と共にして、こうして行う。さらに彼は女の娘を彼に与え、彼女を墮落させようとするが、彼女は彼の側に立たず、彼のためにもならない。ダニエル書 11:14-17.

これらの節に示されている征服は、ダニエル書第8章の成就である。

そして、その中の一つから小さな角が出てきて、南へ、東へ、そして麗しい地へ向かって、非常に大きくなった。ダニエル書 8:9

第9節の小さな角は異教ローマであり、第11章14～17節と一致して第9節は、異教ローマが世界の支配を握るにあたり三つの地理的地域を征服することを示している。その地域とは、南（エジプト）、東（シリア、北の王）、そして麗しの地（ユダ）であった。16節と17節の歴史は、ホワイト夫人が「この預言の成就において起こった歴史の多くは繰り返される」と述べているとおり、40～43節における近代ローマの歴史的な三段階の征服を予示している。

「エジプトは北の王アンティオコスの前に立ちえなかったが、アンティオコスもまた、いまや彼に向かって来たローマ人の前に立ちえなかった。もはや、いかなる王国もこの勃興しつつある勢力に抗しうることはなかった。シリアは、紀元前65年、ポンペイウスがアンティオコス・アシアティクスからその領有地を奪い、シリアをローマの属州としたとき、征服されてローマ帝国に加えられた。」

「同じ勢力はまた聖地に立ち、それを食い尽くすことにもなっていた。ローマは紀元前162年、同盟によって神の民であるユダヤ人と結びつき、その時点から預言の年表において顕著な位置を占める。しかし、実際の征服によってユダヤを支配下に置いたのは紀元前63年に至ってからであり、その経緯は次のとおりであった。」

ポントスの王ミトリダテス討伐の遠征から戻ったとき、ユダヤの王位をめぐるヒルカノスとアリストブロスの二人が争っていた。彼らの争いはポンペイウスの裁きに付され、彼はまもなくアリストブロスの主張の不当さを見抜いたが、長らく念願していたアラビア遠征を終えるまでこの件の裁断を先送りにし、そののち戻ってきて、公正かつ妥当と思われる形で彼らの問題を決着させると約した。ポンペイウスの真意を見抜いたアリストブロスは、急ぎユダヤに戻って臣民を武装させ、強力な防衛の準備を整え、自らの王位が他者に裁定されることを予見して、どのような危険を冒しても王位を守り抜く決意を固めた。ポンペイウスはこれを厳しく追撃した。彼がエルサレムに近づくと、アリストブロスは自らの振る舞いを悔い始め、出迎えて全面的な服従と多額の金銭を約束し、事態の收拾を図った。ポンペイウスはこの申し出を受け入れ、兵の分遣隊を率いるガビニウスを送り、金を受け取らせた。ところがその副将がエルサレムに到着すると、城門は閉ざされ、城壁の上から、その都市はその合意を守らないと告げられた。

ポンペイウスは、このように欺かれることを容赦せず、手元に留め置いていたアリストブロスを鎖につないで、直ちに全軍を率いてエルサレムへ進軍した。アリストブロスの支持者は町を守ろうとし、ヒルカノスの支持者は門を開こうとした。後者が多数派となって優勢になったため、ポンペイウスは自由に市内へ入ることを許された。するとアリストブロスの一党は神殿の丘に退き、ポンペイウスがそこを攻略しようと固く決意していたのと同じだけの覚悟で、その場所を守り抜こうとした。三か月ののち、突撃に足る破口が城壁に開かれ、その地は剣の力で制圧された。続く凄惨な虐殺で、一万二千人が殺された。歴史家はこう記している。ちょうど祭儀に従事していた祭司たちが、周囲で仲間たちが虐殺され、ときには自らの血がいけにえの血と混じり合うほどであったにもかかわらず、荒れ狂う騒擾には気づかぬかのように、平静な手つきと揺るがぬ意志でいつもの務めを続けているのを見るのは、胸を打つ光景であった。

戦争を終結させると、ポンペイウスはエルサレムの城壁を取り壊し、いくつかの都市をユダヤの管轄からシリアの管轄に移し、ユダヤ人に貢税を課した。こうしてエルサレムは初めて、征服によって、やがて「栄光の地」を完全に滅ぼし尽くすまで鉄の支配下に置き続けることになるその権力の手に委ねられた。

第17節. 彼はまた、その全王国の力をもって入ることに心を定め、正しい者たちを伴う。彼はこのようにする。すなわち、彼は彼に女たちの娘を与えて彼女を墮落させる。しかし彼女は彼の側に立たず、彼のためでもない。

ニュートン主教はこの節に別の訳文を示しており、次のように記している。これは意味をより明確に表しているように思われる。「彼はまた、全王国に武力をもって入り込むことを固く決意する。」16節は、ローマ人によるシリアとユダヤの征服にまで叙述を進めた。ローマはそれ以前にマケドニアとトラキアをすでに征服していた。アレクサンダーの「全王国」のうち、ローマの権力に従属させられていなかったものとして残っていたのは、もはやエジプトだけであった。そして今やそのローマの権力は、武力をもってその国に入り込むことを決意したのである。ユーライア・スミス『ダニエル書と黙示録』258-260頁。

われわれはこれらの記事の中で、ダニエル書第十一章三十節と三十一節が四十節と四十一節に対応していること、また三十節と三十一節の歴史が、三本の角の引き抜きとも一致していることを、すでに一度ならず指摘してきた。

私は角について思い巡らしていた。すると、見よ、それらの間からもう一本の小さな角が生え出た。その前に、初めの角のうち三本が根こそぎに引き抜かれた。さらに見よ、その角には人の目のような目があり、大言壮語を語る口があった。……また、彼の頭にあった十本の角、そして新たに生え出て、その前に三本が倒れた別の角—すなわち目があり、非常に大きなことを語る口を持ち、その姿が仲間よりもなお逞しかったその角—のことも。ダニエル書 7:8, 20

ダニエル書8章9節が、異教ローマを玉座に据えた征服の三つの地理的領域を表しているのと同様に、三本の角（ヘルール族、東ゴート族、ヴァンダル族を表す）が引き抜かれたことも、教皇ローマを玉座に据えた征服の三つの地理的領域を表していた。これら二つの歴史はダニエル書11章40～43節と一致し、三本の角が引き抜かれる出来事は30節と31節の歴史と一致する。

「第8節. 私はその角々に心を留めていたが、見よ、それらの中からもう一本の小さな角が生え出た。その前に、初めの角のうち三本が根こそぎに抜き取られた。見よ、その角には人の目のような目があり、大言壮語を吐く口があった。」

ダニエルは角に注目した。その中に奇妙な動きの兆しが現れた。小さな角が（最初は小さいが、のちには仲間よりもいっそう強く太くなって）その間から伸び上がってきた。それはおとなしく自分の場所を見つけてそこを占めていることに満足せず、ほかのいくつかを押し退けて、その座を奪わねば気が済まなかった。その前に三つの王国が引き抜かれた。この小さな角は、のちにさらに詳しく述べる機会があるが、教皇制であった。その前に引き抜かれた三本の角とは、ヘルール族、東ゴート族、そしてヴァンダル族である。そして彼らが引き抜かれたのは、彼らが教皇制の聖職階層の教えと

主張、ひいては教会におけるローマの主教の至上権に反対していたからである。

そして、「この角には人の目のような目があり、大いなることを語る口があった」。その目は、教皇制の聖職階層の抜け目なさ、洞察力、狡猾さ、先見の明を表すのにふさわしい象徴であり、また大いなることを語るその口は、ローマの司教たちの尊大な主張の適切な象徴である。ユライア・スミス『ダニエル書と黙示録』132-134頁。

聖書預言の幻、ことにダニエル書第十一章の幻を確立するのはローマである。その章においては、ミラー派運動以前にすでに成就していた預言史の多くが、ダニエル書第十一章の最後の六節において繰り返されることになっていた。異教ローマと教皇制ローマの双方を王座に据えた三つの地理的障害の征服が第十一章に表されており、これら二つの表象は、現代のローマが再び王座に据えられる時を予表している。幻を確立するのはローマであり、またパウロは、教皇制ローマがその時に現されることを明らかにしている。

誰にも、どんな手段によっても、惑わされてはなりません。というのも、その日は、まず背教が起こり、そして罪の人、滅びの子が現れなければ来ないからです。彼は、神と呼ばれるもの、また礼拝されるものすべてに逆らい、自らをそれらよりも高くし、神であるかのように神の宮に座って、自分が神であることを示します。私がまだあなたがたと一緒にいたとき、これらのことを話したのを覚えていないのですか。今、彼が自分の時に現れるために、それを押しとどめているものが何であるかを、あなたがたは知っています。テサロニケ人への第二の手紙 2:3-6。

聖書の預言における第五の王国として、教皇権は西暦538年に権力の座に就いた。そして第6節を検討する多くの人々は、パウロが「教皇権は538年に明らかにされる」と意味しているのだと疑いなくみなすだろう。これは正しいかもしれないが、少なくともそれはパウロが指摘していた事柄に関する副次的な真理にすぎない。パウロは、すべての預言者と同様、自分の時代よりも終わりの時代について多く語っている。彼は、預言者として他のすべての預言者と一致しており、教皇権がどのように預言的に明らかにされるかについて言及していたのである。行に行を重ね、幻のない者は滅びる。そして幻のない者が幻を持たないのは、その幻を何が確立するのかを知らないからである。ローマがその幻を確立するのだと知ることは、生死を分ける理解である。パウロは、他の預言者たちと一致して、終わりの時代のローマである教皇ローマを明らかにするものが「彼の時」と特定している。ローマに結びつけられた預言的な「時」こそが、ローマが何であり誰であるのかを明らかにするのである。

次回の記事でこの研究を続けます。

使徒パウロは、テサロニケ人への手紙第二の中で、教皇権の確立へと至る大いなる背教を予告した。彼は、キリストの日は「まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現れなければ」来ないと宣言した。「彼は、神と呼ばれるもの、礼拝されるものすべてに逆らい、自らをそれら以上に高め、神の宮に座して、神であるかのように自分を示すのである。」さらに使徒は兄弟たちに、「不法の秘密はすでに働いている」と警告している（テサロニケ人への手紙第二 2:3、4、7）。その早い時期にすでに彼は、教会に忍び寄り、やがて教皇制の発展への道を整えることになる誤りを目にしていた。

少しずつ、はじめはひそかに沈黙のうちに、そして力を増し人々の心を支配するにつれて、いよいよ公然と、「不法の奥義」はその欺瞞的で冒瀆的な業を推し進めた。ほとんど気づかれないうちに、異教の風習がキリスト教会に入り込んだ。妥協と迎合の精神は、異教のもとで教会が耐え忍んだ激しい迫害によって、しばらくの間は抑えられていた。だが迫害がやみ、キリスト教が王たちの宮廷や宮殿に入り込むと、教会はキリストとその使徒のへりくだった簡素さを捨て、異教の祭司や支配者の虚飾と驕りに取り替え、神の要求に代えて人間の学説と伝統を据えた。四世紀初頭のコンスタンティヌスの名目上の改宗は大きな歓喜を呼び起こし、義の形をまとった世が教会の中へ歩み込んできた。こうして墮落の働きは急速に進んだ。異教は打ち負かされたかのように見えながら、かえって勝者となった。その霊が教会を支配した。その教義、儀式、そして迷信が、キリストの名を告白する者たちの信仰と礼拝に取り入れられた。

異教とキリスト教の間のこの妥協は、神に敵対し、自らを神以上に高める者として預言されている「罪の人」の台頭を招いた。その巨大な偽りの宗教体系は、サタンの力の傑作であり、彼が自ら王座に就き、自分の思いのままに地上を支配しようとする努力の記念碑である。大いなる論争、49、50。